博 士 学 位 論 文 要 約

論 文 題 目： 台湾の国際結婚家庭における母親の母語と文化の継承
—2010 年前後の変化を中心に—

氏　　名： 黄　琬茜

要　　約：

1. 目的

近年、台湾、日本、韓国は受け入れ側の国として、そして、中国本土と東南アジアの国々は、送り出す側の国として、アジアの女性の国際結婚の増加が注目されている。台湾、日本、韓国における国際結婚を巡る諸問題と歩みなどは、類似するところが多い一方、相違するところもあるため、それぞれの動向や現状を互いに情報交換して注意を向ける必要があると思われる。特に、台湾における国際結婚の動向や支援策などは、日本や韓国より進んでいるため、その現状や問題点などを把握する研究は、国際的に発信する意義があると考えられる。そのため、台湾の国際結婚の現状と実態を多面的・多角的に考察して明らかにすることは、重要であると考える。このことが本論文の主要な研究の目的である。

2. 各章の概要

第 1 章では、台湾における東南アジアまたは中国本土出身の女性配偶者という「外籍」の配偶者との国際結婚の背景を述べた。国際結婚の形はさまざまあるが、なぜ「外籍」の配偶者と結婚するのか、なぜそのような国際結婚の手段を選んだのか、という台湾社会ができたユニークなニーズや理由を、その背景として説明した。具体的には、「外籍」の配偶者の流入背景や「外籍」の配偶者のいる家庭の社会的経済的地位や現在、このような国際結婚の割合などについてである。政府の統計データによる台湾結婚総数での外国人配偶者の割合、そのうち、東南アジアと中国本土から来た女性配偶者を二つの群にわけ、それぞれの割合を示し、そして、彼女らの子どもである「新台湾之子」が小学校に就学している割合のデータを整理した。また、先行研究では、台湾政府は「外籍」の配偶者への支援政策を簡潔にまとめ、過去からの台湾社会の「外籍」の配偶者に対する態度や印象を紹介した。つまり、台湾社会の 2010 年頃までの、彼女らや彼女らにかかわる家族に対する印象や評価などの先行研究をまとめた。

第 2 章は、本論文と関連する先行研究をまとめた。目的で述べたように、なぜ、近年、台湾、日本、韓国は受け入れの国として「外籍」の配偶者との結婚が注目されているのか、その三ヶ国の類似点および相違点を探った。台湾と同じような東南アジアと中国本土出身の花嫁を迎えている日本と韓国の状況を比較しながら、それぞれの共通点と相違点を見出した。それぞれの国における国際結婚を巡る問題をまとめた上で、台湾の国際結婚の現状や問題点などを把握する重要性と必要性を提示した。具体的には、日本と韓国より早く起

きた問題を提起し、母親のことばによる子どもの養育、しつけの問題、また、母親から子どもに悪い影響をもたらしたという批判や非難などの経緯や問題点があることを述べた。それによって、後述する第 3 章と第 4 章、また第 9 章と第 10 章のような研究の重要性を示した。さらに、それぞれの国際結婚家庭にインタビューした結果から、新たな国際結婚家庭で生じた課題を見出した。それは、本論文の主軸だと考えられる、「外籍」の母親の母語継承問題である。黄（2012、2014）の研究を基に、「外籍」の母親の母語継承に関する意識と行動などをさらに深く研究する意義を第 2 章で提示した。

第 3 章では、「外籍」の配偶者は子育てのとき、特に、子どもの勉学およびしつけの側面に関して、どのような養育態度をもっているのか、子育ての戦略と特徴を検討して明らかにした。そのうち、東南アジアおよび中国本土から来た「外籍」の配偶者を 2 つの対象者のカテゴリーに分けて計母親 12 名に対して、半構造化インタビューを実施した。その結果からは、調査対象者の全員が「中国語」の教科の宿題などの支援で困難を経験していたことが明らかにされた。中国本土から来た「外籍」の母親でさえも、台湾で使用される繁体字と発音記号の違いのために困難を感じていると推察された。しかし、母親の学歴や職業とは関係なく、子どもの宿題の指導、学習の支援に対して、積極的な態度を持っていると明らかになった。さらに、子どものしつけにも注意が向けられていることが示唆された。

第 4 章では、従来の「新台湾之子」の学習や人間関係などの問題に対する否定的な批判が多かったので、「新台湾之子」の学校生活に焦点の一つを当て再調査して考察した。同時に、従来の研究で取り扱わなかった、家庭生活という新たな視点も視野に入れて調査した。11 名の「新台湾之子」へのインタビューを通して、家庭生活と学校生活での二つ生活場面から、「新台湾之子」のありのままの姿を考察した。その結果、従来の否定的な批判と異なって、「新台湾之子」は、学校生活において、学校の勉強が楽しく、よい成績を取ったり、学校の友だちや先生との良好な対人関係をもったりしていることが示された。また、家庭生活において、母親の家の仕事分担のため、自発的に家事を手伝ったり、兄弟の面倒を見たりしていることなどが明らかになった。

第 5 章では、「外籍」の配偶者の家庭内のことばの使用状況が明らかになった。そのうち、東南アジア出身の配偶者は家庭内で自分の母語をほとんど使っておらず、同様に、中国本土出身の配偶者も、母語である「郷土言語」を使っていない、という状況が明らかになった。これを踏まえ、東南アジア出身の配偶者も、中国本土出身の配偶者も、自分の母語や文化をあまり重視してないという結果が明らかになった。また、彼女らの子どもに、母親の母語と文化への想いを聞くと、子どもは母親との親密さによって母親の母語を学習する意欲が変わるという結果が示唆された。

第 6 章では、第 5 章の研究結果を踏まえ、東南アジア出身の母親の母語継承に関する継承意識から具体的な行動を起こすまでのプロセスを明らかにした。つまり、母語継承の過程において、なぜうまく継承できるのか、なぜ継承できないのか、その母親の促進、葛藤、抑制などの心理的状態を考察して分析した。その結果、母親 43 名の母語継承に対する意識から行動までのプロセスを分析し、類型化した結果、それぞれを「継承型」、「変化型」、「断念型」という、大きく 3 つのカテゴリーに分けられた。さらに、「継承型」を「高意識―積

極的行動」、「高意識―消極的行動」、「低意識―消極的行動」という 3 つのパターンに細かく類型化した。これらの分析結果によると、母親自身より、その家族の方が母語継承の決定権をもっているという示唆が得られた。また、母親自身の都合や態度によって母語の継承が左右することもあった。

第 7 章では、東南アジアから来た「外籍」の配偶者数より、数倍多く来た中国本土の「外籍」の配偶者を対象にし、彼女らの母語継承に焦点を当て調査を行った。中国本土出身の母親の母語と言えば、中国語だと多くの人に認識されているが、実際には異なるところもある。本章で着目する中国本土出身の母親の母語というのは、その母親の「郷土言語」を指す。「郷土言語」は華人社会の多くの家庭にとって、不可欠なコミュニケーション手段であるため、彼女らの母語である「郷土言語」の継承を重視する必要があると考えられる。そのため、第 7 章では第 5 章の研究結果を踏まえ、中国本土出身の母親は、自分の「母語」である「郷土言語」の継承についてどう考えているのか、なぜそのような考え方をもっているのか、つまりその意識はどのように形成されたのか、などについて明らかにした。

第 8 章では、台湾政府は東南アジア出身の母親の母語継承をサポートするため、ベトナム語、インドネシア語、タイ語、ミャンマー語、カンボジア語という 5 つの言語の母語の継承を小学校に導入していた教科書に関する検討である。台湾政府は母語教育を小学校に導入するために、『新住民母語生活学習教材』を開発、発行した。しかし、教育現場では、その教材がほとんど使われていないという実情があった。そのため、本章では、なぜ『新住民母語生活学習教材』が使用されなかったのかという理由を検討しながら、その教材のメリットとデメリットを分析し、明らかにした。

第 9 章では、「外籍」の配偶者と「新台湾之子」の人数が増加しつつあることに伴い、台湾社会は彼らにどのように向き合い、そして、昔と比べてどの程度彼女らを受容しているのかについての現状を考察する必要がある。それを明らかにするため、台湾人を調査対象者として、「外籍」の配偶者とその家族関係への印象に関する調査Ⅰを行った。そして、「外籍」の配偶者が家族と付き合う状況について、彼女らをインタビューする調査Ⅱを行った。「外籍」の配偶者は、妻、嫁という役割に比べて、母親としての役割を一番よく果たしているという結果は、近年の一般の台湾人がもつ彼女らに対する印象と一致していることが明らかになった。調査Ⅰと調査Ⅱの結果から、台湾人が見た「外籍」の配偶者の姿が一致しているということが明らかにされた。

第 10 章では、第 9 章の台湾人の「外籍」の配偶者とその家族関係への印象という視点から広げ、「外籍」の配偶者自身への印象をより具体的にするため、13 項目の形容詞対を用いて、調査を行い、分析した。さらに、台湾社会での、「「外籍」の配偶者に対する態度」を「尊重と受容」、「社会問題」、「差別と拒絶」、「脆弱な結婚」、「積極的貢献」という 5 つの社会的視点にわけ、それぞれの側面から「外籍」の配偶者を受け入る状況を検討して分析した。311 名の台湾人を調査対象者とし、その 5 つの側面において検討して類型化した結果、台湾人は「否定的態度群」、「傍観者態度群」、「肯定的態度群」という 3 つの群に分けられた。そのうち、肯定的態度をもつ台湾人が最も多いという結果から、現在、「外籍」の配偶者は、台湾人に受け入れられているということが推察された。